巻 頭 言

「医学部口腔外科と歯学部口腔外科から見た景色」

日本歯科大学生命歯学部口腔外科学講座
里 見 貴 史

私は、大学卒業後28年間を医学部口腔外科で過ごしました。その間、医科における麻酔科研修や救命救急研修にはじまり、隣接科である耳鼻咽喉科、形成外科、脳神経外科等との合同手術、また他科の先生方とのチーム医療や共同研究を通して良好な関係を築いてきました。そして、この経験を通して、これからの口腔外科医の養成には「医の心」・「全身を診て口腔を診る」・「チーム医療」等の経験や識見が必要であると考えようになりました。

大学院卒業後の他科研修では、心身共に鍛えられました。特に、救命救急センターにおける研修は、今なお鮮明な記憶として残っています。自分が研修した救命救急センターでは、ありとあらゆる処置、手技や手術介助を医師と全く対等に経験させてもらうことができました。当時の救命救急は、3Kの代表と言われ、卒業生の多くが敬遠する診療科でした。そんな状況下でありながら、当時のセンター長は、事あるごとに「救命救急はコンビニでなきゃダメだ！24時間、開いててよかったよ。すべて断るな。」とスタッフに声をかけていました。当然、当直では一睡もできず、そのまま翌日勤務して、夜になるとまたホットラインが鳴り、いつしか帰れない。そんな苦しい研修でしたが、センター長、グループ長をはじめとしたすべての先生が大変勉強熱心で面倒見がよく、なにより救命に情熱を傾けている姿が眩しく、自分もこうありたいと強く思いました。ここで得た経験や知識は、その後の口腔外科医としての臨床力をupさせたばかりか、臨床医として精神的にも成長することができた掛け替えのないものになりました。必ずしもすべての医学部口腔外科や病院歯科口腔外科で、同じような研修が行われているわけではなく、たまたま、私が身を置いた環境が恵まれていたのかもしれませんが、しかし、このような卒後臨床研修が受けられたからこそ、若手歯科医師が将来を担う口腔外科専門医へと成長するには、口腔外科のスペシャリティを追求する前に他科の研修が含まれた研修カリキュラムが必要であると痛感しているのです。

現在、医学部口腔外科から歯学部口腔外科に異動して3年が経過しました。医学部口腔外科と大きく異なり、学部教育に割かれる時間が非常に多く、全く違う景色に戸惑

いながらも、順応すべく精進しております。そんな中、常に念頭に置いていることがあります。それは、歯学部の学生は、将来の歯学部や医学部の口腔外科、病院歯科口腔外科、さらには日本口腔外科学会を背負って立つ大切な口腔外科医の卵であるということです。口腔外科学の教育を通して、一人でも多くの学生に興味を持たせることが、将来の人材確保に繋がる極めて重要な一面でもあります。このように歯学部口腔外科には、医学部口腔外科や病院歯科口腔外科にはない大変重要なミッションがあり、その教職に携わる者はそれ相応の誇りと自覚が必要となります。多くの歯学部には、自分が経験してきたような医科臨床研修を行う環境がありませんので、臨床研修環境の拡充を計るには、幅広く医学部口腔外科と連携協力する必要があります。医学部口腔外科や病院歯科口腔外科は、地域の中核としての機能を担っていますが、マンパワー不足が否めない現状にあります。そこで歯学部口腔外科から、その人材を供給し、派遣先の病院で研修を受けさせてもらうなども一案ですが、各施設で事情が異なるため、実現には多くの課題があるのも事実です。

日本歯科専門医機構の思い描く国民に対する歯科専門医像とは、「それぞれの専門領域において適切な研修教育を受け、十分な知識と経験を備え、患者から信頼される専門医療を提供できる歯科医師」と記載されています。まさに、自分が理想としている口腔外科専門医像であり、日本口腔外科学会から発信されている専門医像そのものです。医学部口腔外科と歯学部口腔外科から見える景色は違えども、双方が協力して、適切な研修教育を施し、十分な知識と経験を与え、患者さんから信頼される口腔外科専門医を育成し続けることで、口腔外科が広く社会に認知され、われわれ口腔外科医の社会的地位が向上し、ひいては日本口腔外科学会の発展に繋がると信じています。

医学部、歯学部双方の口腔外科を経験した自分が感じた思いや願いについて話しました。最後に、今こそ、ジャパングレーの「ONE TEAM」精神で、学会を通して一致団結して若手口腔外科医の育成に取り組んで行こうではありませんか！